



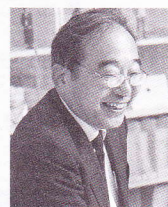
統計から社会の実情を読み取る

第169回 リスクや失敗を恐れる日本人（国際比較）

本川 裕 | Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』（技術評論社、2010年）、『なぜ、男子は突然、草食化したのか：統計データが解き明かす日本の変化』（同上、2019年）、『統計で問い直すはずれ値だらけの日本人』（講談社、2025年）等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



主要先進国の中で最もリスクに慎重な日本人

人生にリスクや失敗はつきものである。しかし、それを恐れるだけなのか、それともむしろチャンスととらえるかでその後の人生は大きく異なってくる。ここでは、成人と子どもの両方で、リスクや失敗に対する姿勢を各国間で比較した意識調査結果を見てみよう。

結論的には、日本人は、リスクを好機ではなく単に脅威と感じる傾向があり、世界の中で最も失敗を恐れている姿が明らかである。慎重さが共通と見られるドイツ人と日本人だが、ドイツ人のプラス思考とは対照的な日本人のマイナス思考が目立っている。

まず、成人の意識調査結果から見てみよう。

OECD（経済協力開発機構）のスキル報告書は、ロイズが2019年に行ったリスクに対する各国意識調査の結果を掲載している。これは、リスクを「危険」と考えるか、「好機」と考えるかの違いを探った調査である。

OECD全体では、リスクを「危険」と考え

る回答率、「好機」と考える回答率がそれぞれ68.2%、22.3%となっており、多くの者は「危険」と考え、「好機」とするのは2割強の少数派であることが分かる（図1参照）。

対象40カ国の中で日本は、「危険」回答が79.6%と7番目に高く、「好機」回答が15.3%と28番目に低い。

ちなみに「危険」回答の最大、最小は、それぞれ、メキシコ、ラトビアであり、「好機」回答の最大、最小は、それぞれ、ドイツ、クロアチアであった。

「危険」回答の高い国は、メキシコ、コロンビアなど中南米の国が多く、実際、犯罪などの危険が多い国だから回答も「危険」が多くなっていると考えられる。日本は安全な国であるはずなのに「危険」回答が多い点が目立っているといえよう。ヨーロッパでも、スペインやスウェーデンは日本以上に「危険」回答が多くなっているが、これは日本と同様に用心深い国民性によるところが大きいと考えられよう。

表1では主要先進国（G7諸国と韓国）のデータを抜き出した。日本が「危険」回答がトップ、

リスクをどうとらえるか？

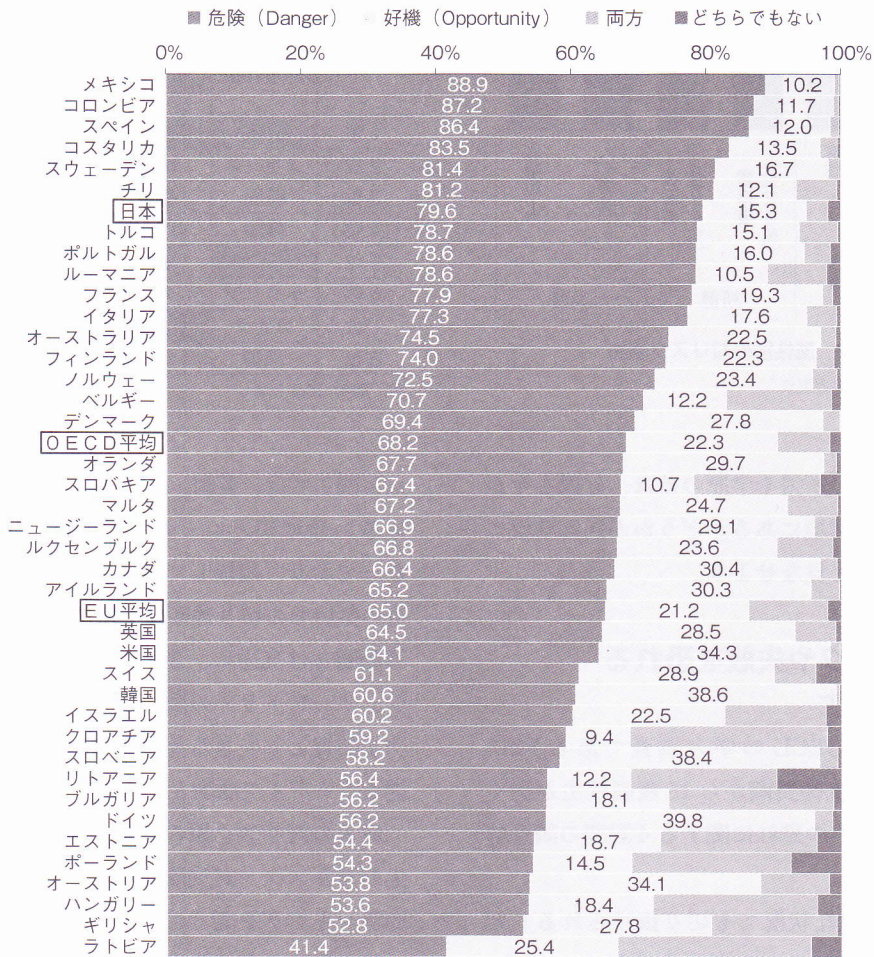


図1 リスクを脅威と取るかチャンスと考えるか (国際比較)

注) World Risk Poll (2019), The Lloyd's Register Foundation World Risk Poll Report 2019 による。
資料) OECD Skills Outlook 2023, Figure 8.12.

「好機」回答が最低であるのが目立っている。同じく慎重で用心深いと考えられているドイツが「危険」回答最低、「好機」回答最高であるのは意外である。

なお、同じデータで属性別の「危険」回答率を比較すると(図2)、男性より女性、富裕層より貧困層、大卒以上より大卒未満の方がリスクを好機というより危険と感じやすいことが分かる。男女差は本性的なものに根差していると

表1 主要先進国の対リスク観 (%)

	危険 (Danger)	好機 (Opportunity)
日本	79.6	15.3
フランス	77.9	19.3
イタリア	77.3	17.6
カナダ	66.4	30.4
英国	64.5	28.5
米国	64.1	34.3
韓国	60.6	38.6
ドイツ	56.2	39.8

注・資料) 図1と同じ

リスクを「危険」と捉える割合（OECD平均）

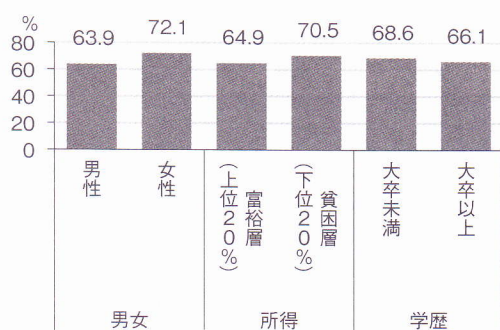


図2 属性別の対リスク姿勢

注・資料) 図1と同じ

考えられるが、所得や学歴の差は、好機を生かせる恵まれた環境にあるかどうか回答結果に反映していると見なせよう。

世界一リスクや失敗を恐れる日本の高校生

図3には、OECDの学力調査であるPISA調査における生徒質問から15歳高校生が抱くリスクや失敗への恐れに関する4設問の調査結果を示した。

まず、「困難な状況でも切り抜けられる」という自信をもっている高校生は日本の場合、58.6%とOECD諸国の中でも一段と低い最低値となっている。

さらに次の失敗に対する気持ちの持ち方に関する3設問のうち、「他人にどう思われるか悩む」や「ダメな自分を悔やむ」といったマイナス思考の比率は、やはり、OECD諸國中、最も高くなっている。

ただし、失敗に際して「どうしてよいかわからなくなる」というパニック状態に関しては、日本の場合、60.9%とそれほど高くなく、OECD諸國中9位である。あきらめが早く、失敗で取り乱すことはそれほどないようだ。この

表2 主要先進国生徒の対リスク・対失敗観

マイナス順位	困難な状況でも切り抜けられる	失敗しそうなとき他人にどう思われるか悩む	失敗しそうなとき自分を悔やむ	失敗しそうなときどうしてよいかわからなくなる
1位	日本	日本	日本	英国
2位	フランス	韓国	韓国	カナダ
3位	英国	英国	カナダ	米国
4位	韓国	カナダ	英国	フランス
5位	ドイツ	米国	フランス	日本
6位	イタリア	イタリア	米国	イタリア
7位	カナダ	ドイツ	イタリア	韓国
8位	米国	フランス	ドイツ	ドイツ

注・資料) 図3と同じ

点に関しては、英国、カナダ、オーストラリア、あるいは米国といった英語圏諸国で値が高くなっており、確信している成功が得られない場合の気持ちの切り替えは不得意なようだ。一方、英語圏とは真逆に、最下位からオランダ、ドイツ、オーストリアの順である。欧米の中でも成功を前提としすぎる英語圏に対して、失敗を前提とするドイツ語圏という違いがありそうだ。

成人の対リスク観の結果と同じように、高校生の対リスク・対失敗観に関して、主要先進国のランキングを表2に整理した。

成人向けと高校生向けという全く異なる調査であるにもかかわらず、日本やドイツに関して、ほとんど共通の結果となっている点に両調査の信ぴょう性の高さが感じられる。

日本人が用心深く、失敗を恐れるというのは納得的であるが、日本とドイツがリスクや失敗に対する姿勢に関して正反対である点は、やはり、気になる。ドイツの場合、慎重さがマイナスにならないように、失敗を恐れない気風を子どもの頃から養う国民性なのであろうか。いずれにせよドイツの場合、リスクテイキングの気風があるといっても、地がチャレンジング（または無謀）な英米とは異なった脈絡で考える必要があろう。



図3 リスクや失敗に対する高校生の恐れ (OECD 諸国比較)

注) 15歳高校生徒に対する質問票の結果
資料) PISA 2018 Results (Volume III), Figure III.13.1